

ことばの教室

自立活動

ことばの発達とコミュニケーションを促す指導

(ビデオによる公開) 1次公開

撮影 令和元年 5～9月

児童 1年 男児 1名

指導者 宮崎 千春

1 ことばの教室の指導について・児童の実態

(1) ことばの教室の指導について

ことばの教室では、「通級による個別学習」という教育形態をとっており、児童が通常の学級に在籍しながら、決められた時間にことばの教室において、それぞれの教育的ニーズに即した学習を行っている。

教育目標は、「ことばやコミュニケーションの障がいのため、本来、児童がもっている能力を十分発揮することができなかつたり、或いは集団参加に消極的になつたりしている児童に対して、その障がいによって生ずる種々の困難を軽減していくために必要な指導・支援を行う。また、より活発なコミュニケーション活動をめざし、積極的に楽しく生活していこうとする児童の育成を図る」としており、その目標に向けて、教育課程に基づき日々の指導・支援を行っている。

ことばの教室の教育課程は、自立活動に依拠し、その障がいによって生ずることばの課題の改善・軽減に向けた指導、コミュニケーションや心理的側面に関する指導・支援など、学習上または生活上の困難の改善・軽減を目的としている。つまり、ただ単に表面上に表れた障がいや困り感の改善・軽減のみの指導にとどまるのではなく、表面に現れる姿の背景にあるものを探りながら指導・支援を進めていくことが大切であると考え。そのために、「担当者と子どもとの関わりやわかり合いを大切にした支援」を基本におき、次の三点を指導・支援をする上で大切にしている。

第一に「的確な子ども理解」である。支援計画を立てていく際には、子ども本人や保護者の主訴に基づきながら、現在のことばの状態を把握するところから始まる。保護者面談、多面的な視点での行動観察や検査により、総合的に子どもを見て実態把握することが必要である。その情報を基に、コミュニケーション上の困難さや子どもがかかえている不安や心配（困り感）などを総合して考えていくことが大切である。その際、言語症状だけにとられるのではなく、子どもと周りの人々との関係にも着目することが重要である。言語が発達する基になる力がどのように育ってきたか、また、周りの人との関係や育った環境がどのように影響してきたかということを見ていくことも重要である。そのため、保護者や学級担任と話し合い、「子どもが成長してきた過程」特に「人との関わり」という視点を含めて考えて「その子どもにとっての課題」を明らかにする。

第二に大切なことは、「子どもとわかり合う関係を培うための見取り」である。子どもにとっての課題が改善され、思い通りにコミュニケーションをとることができるようになるために必要な条件の1つは、子どもと誰かとの間に「わかり合う関係」ができていくことである。子どもは「わかった」「わかってもらえた」などの体験を通して満足感を味わい、そこから「もっと知りたい」「もっとわかってほしい」という思いが生まれ、自ら相手に働きかける主体的なコミュニケーションが始まると考える。また、「関わる」とは、担当者の教育的な関与全般を示すものである。「見守る、待つ、わかろうとする、受け止める、わかりやすく伝える、共感する、ほめる、励ます、課題に取り組みさせる」など、様々な関わり方がある。子どもと「わかり合う関係」を培うために、担当者がどのように関わったか、そ

れに対し子どもはどのように反応し、変化したかを丁寧に見取り、次の活動に生かしていく必要がある。

第三に、「子どもをとりまく人々との連携・協働」である。子どもが所属する学校において担任教諭と情報交換し、子どもの様子について共有することが適切な理解のために必要である。その上で同じ方針で、また必要に応じて役割分担しながら支援を進めていくことが大切である。また同時に、保護者への支援も指導の一環として重要な意味をもっている。それは、子どもが日々積極的に楽しく生活していくことができるようにするためのものであり、子どもの行動の理解や日常生活での関わりに関することが主な内容となる。保護者や関係者と、子どもの実態や指導について共通理解のもとに対応していくことが大切である。

(2) 児童の実態 ～略～

2 研究との関わり

本校の研究主題「学び合いを通して自分のよさに気づき、よりよく生きようとする子供の育成」を受けて、ことばの教室では、「肯定的な自己観」「豊かな自己表現」「主体的な集団参加」といった力を育んでいきたいと考えている。ことばの教室に通う子どもたちの中には、言語症状に加えて、自分に自信がもてなかったり、他者とうまく関われなかったりするために集団参加に消極的になってしまう子もいる。子どもたちには、集団の中で人との関わりを深め、自分のよさを大切に、意欲や自信をもって学校生活を送っていけるようになってほしい。そのためには、言語症状の改善という視点だけでなく、自分自身を肯定的に受け止め安心して自己表現ができるようになることや、コミュニケーションを豊かにしていくことが必要な力であると考えます。こういった力を育てるために、多角的な支援のあり方や方法を研究し実践を進めてきている。

3 指導の目標

- ・吃音にとらわれずに、自分が感じたことや伝えたいことを安心して話す。
- ・ゲームを通し、担当とのやり取りを楽しむ。
- ・いろいろな話し方や質問に、自分の言葉で表現する。

4 指導の展開

内容	児童の学習活動	●支援の工夫 □評価
コミュニケーション	1 自由会話 ・学校での出来事について自由に話す。	●話しやすい雰囲気を作り，話したいことを最後まで表現できるようにする。 ●ゆったりとしたやりとりになるよう心がける。 □会話を楽しみながら，言いたいことを最後まで話すことができたか。
発話意欲の向上 気持ちの開放	2 ゲーム（ガスアウト・玉入れ 他） ・ゲームのルールを理解し，それぞれのゲームを2～3人で行う。	●本児と共にいろいろなゲームをし，会話を楽しむことができるようにする。 ●ルールが分からない時に，聞きやすい雰囲気を作る。 □一緒に楽しんで行うことができたか。 □分からないことを聞くことができたか。
吃音に向き合う コミュニケーション	3 吃音すごろく ・さいころを振り，止まった所の指示に従う。カードの質問に答え，すごろくを進める。 ＊本児に「吃音」という言葉を使って指導をしていない。 ＊いろいろな話し方を体験することや，気持ちの変化等を知ることを使用する。	●「すごくすごろく」(*)を使い，会話を楽しみながら活動を進める。 ●「吃音」という単語がある質問を抜き，話し方のカードや一般的な質問カード等を使う。 ●一人が引いた質問に対し，本児と担当の二人が答える。 ●話したくないことは，話さなくてもよいことを伝える。 □自分の考えや思いを，最後まで話すことができたか。 □いろいろな話し方や会話を楽しんで行うことができたか。

(*)「すごくすごろく」…吃音や自分の思いを気軽に話すことができるようにする教材(ことばの臨床教育研究会発行)

5 指導の評価

- 吃音にとらわれずに，自分が感じた事や気持ちを安心して話すことができたか。
- ゲームを通し，担当とのやりとりを楽しむことができたか。
- いろいろな話し方や質問に，自分の言葉で表現することができたか。